

保育のクロスロード 保育は素敵な物語 (2) 走り続けるとも君

湯澤美紀
(大学教員)

「保育は素敵な物語」。今回は、その二回目のお話です。

五歳のとも君(仮名)は、自閉症スペクトラムの症状をもっていました。乗り物が大好きで、電車の図鑑を開いては、うっとりときき、真を眺めます。しかし、いざ走り始めると、動きも素早く、あつという間にスタートダッシュし、辺りを駆け巡ります。そんなとも君の一年を追った私。それから三年。とあるクラスで一人の女の子に出会いました。

走るの大好き

私は、ある研究を通して、とも君と出会いました。「特別な支援を必要とする子どもたちが、いかにして健やかに育っていくことができるのであろうか」。この問いを立て研究をスタートするにあたり、仲間と議論を重ねる中で、「子ども一人ひとりを理解できる先生」の保育から学ぶことが大切ではないかという結論に至ったのでした。そこで私は、三人の園長先生に協力を求めました。「先生方が出会った保育者の中で、この人という方がおられ

湯澤美紀(ゆざわみき)
ノートルダム清心女子大学。専門：保育学・発達心理学・
幼稚園教育実習担当。

たら教えてください」。すると、三人の先生の口から、一人の先生の名前が挙がりました。森山先生でした。早速、森山先生の園の園長先生に、研究の趣旨をお伝えしました。園長先生はすぐにご快諾くださりました。そして森山先生は、「私でいいんですか?」と躊躇されつつも、「お役に立てるかどうか」と、お受けくださいました。

とも君は、森山先生の五歳児クラスの男子です。すでに自閉症スペクトラムの診断を受け、療育にも通っていました。

観察初日の朝、一人の男の子が私の目の前に飛び込んできました。とも君です。一直線に保育室に小走りで行って来ます。そして、カバンを勢いよく机に置き、一瞬立ち止まると、帽子をかぶって、園庭に飛び出していきましました。まるでハチドリのような勢いです。おそらく、登園時、すでに園庭でかけっこが

始まっていたのを横目で見えていたのでしょうか。勢いもそのままに遊びの輪に飛び込んでいきました。

とも君はとにかく走ることが大好きです。しかし、勢い余って、みんなとは違うルールになってしまふこともありましました。

園では、運動会が終わってからも、リレー遊びが子どもたちの遊びの中に引き継がれていました。二つのチームに分かれ、それぞれがバトンを持ち、スタートします。とも君は走り出し、一周してスタート地点に戻ってきます。次の子どもがバトンを渡されるのを今か今かと待っています。とも君はバトンと共にさっそうと駆け抜け、さらに走り続けるということもしょっちゅうでした。とも君のもつ、活動の切り替えの難しさといった特徴は、いろいろな遊びの中にも顔を出します。しかし、どんな時も、森山先生は、とも君の気持ちを受けとめる保育を行っていました。

先生のまなざし

森山先生の声は、澄んでいて清らかです。声掛けも、子どもの耳に届くちょうどよい大きさに届けられます。組活動の時間、子どもたちは自由遊びの活動を終えて、保育室に戻ってきます。子どもたちは集まり、出席確認をした後、歌を歌ったり、その日の活動をしたりします。とも君は、目の前の遊びを終えてクラス一斉の活動に入ることに時間がかかります。

ある日のことです。その日、とも君は、クラスの隣の部屋の環境としてあったピザ作りのコーナーに夢中でした。紙皿にペンでピザのトッピングを描いていきます。組活動の時間が来ました。しかし、とも君は、クラスに戻りながらピザの作りかたを思い出さず、紙皿に目をそらしません。森山先生は、とも君に

近づき、とも君の体を両手でそっと包みます。「とも君、あと何枚ピザを作ったら、お部屋に帰ってくる？」

優しい声で尋ねます。最初、とも君はその質問が耳に入らなかったようですが、もう一度、ゆっくり森山先生が尋ねました。

「よん！ よん！」

そう言うのと、とも君は、紙皿の方に目を再び向けました。

「わかった。待ってるね」

森山先生は、私に目配せをして、クラスに戻っていききました。私もうなずき返しました。それからとも君の動きのさらに速かったこと。紙皿にペンでグルグルぐると渦を描いて、隣に重ねていきます。一枚、二枚、三枚。すぐに三枚を描き終わりました。私は、「次の四枚目で終わることができるかな？」と思いつつ見守っていました。すると、とも君は、四枚目の紙皿を手にとると、先程ま

での動きにブレーキがかかったかのように、お皿をじつと見つめた後、端にゆっくりと置きました。そして、すばやくその下の紙皿を取り、またペンでグルグル描き始めます。そして、それから二枚、計五枚を描き終えたところで、森山先生が再びやって来ました。森山先生の姿に気付くと、とも君は走ってクラスに戻っていききました。保育室の中から、「おかえりなさい」という子どもたちの声が返ってきました。

私は、森山先生にあのことを伝えなければと思いました。確かにとも君の方法は違ったけれども、とも君は、森山先生との約束は守っていたのです。そのことをお伝えすると、森山先生は、にこっと笑われて一言。

「うん。わかってました。きつとどこかで私との約束は守ってくれているって」

そして次の瞬間、「かわいいよね」と、さらにこぼれる笑顔で語られました。

クラスの仲間

森山先生の、一人ひとりの子どもたちへの信頼に基づいたクラスづくりは、しっかりとクラス全体に浸透していました。

ある組活動での一コマです。その日は、二クラス合同で、ルール遊びを行うことになっていました。遊戯室の中央に、大きな線を縦に端から端まで引きます。子どもたちは四つのグループに分かれます。二グループが、左右の壁に一列にそれぞれ並び、合図とともに、中央まで駆け寄ります。そして、中央でペアの友達を見つけて、じゃんけんをします。負けたら、自分の壁側に走って逃げます。勝ったら、相手を追いかけます。逃げたほうが、つかまらずに壁まで逃げ切ったら勝ち、というゲームです。残りの二グループは、遊んでいる子どもたちを見て楽しめます。

私は遊戯室の端に立ちながら、「これは、と

も君には苦手な遊びかもしれない」と思っていました。走りたい気持ちに先に立つたら、途中で立ち止まってじゃんけんをするといった切り替えは、とも君には難しいでしょう。やはり、そうでした。とも君は、スタートすると、そのまま向こうの壁まで突進していきましました。ペアになるはずの子は、中央の線で立ち尽くしています。そして、誰もいなくなると、スタートラインまで戻ってきました。もう一回しましたが、同じことでした。とも君は、ルールを逸脱しています。「他の子どもはどう思うだろうか?」と、私の気持ちは少しザワつきました。すると、私の隣で遊びの様子を見ていたクラスの女の子二人が、こそこそ耳打ちをしています。

「もしかして……」と、私は勝手に、あるシナリオを予想していました。しかし、うれしい方向で予想は裏切られました。

「ねえ、見て。とも君って走るの早いじゃん」
「そうだよね。すごいよね」

もちろん、とも君のペアの子に対する配慮は求められるところだと思えます。しかし、ここで、ルールを逸脱しているとも君をルールの枠だけで捉えるのではなく、とも君のもっている本来の持ち味を認めている女の子たちの姿に、森山先生の真のクラスづくりを教えてもらった気がしました。

今も走っている

私は、三年後の春に、その園を訪ねていました。にぎやかな朝の情景です。私は、なぜか真つすぐ、一つのクラスに向かいました。そして、絵を描いていた二人の女の子に、

「何を描いているの?」

と、声を掛け、お話を始めました。すると、不思議なことに、とも君の思い出が次々と頭に浮かんできます。以前にも、園自体には訪

れていました。しかし、こうして保育室に足を踏み入れるのは、あれ以来、初めてのことでした。「だからかな」。そう思っていました。

森山先生はもう他の幼稚園に異動されました。しかし、何人かの先生は当時からそのままおられます。その中のお一人が、保育室にいる私に気付いて声を掛けてくれました。

「今、先生がお話しされていた女の子は、とも君の妹ですよ」

そう言われてみれば、どこか面影があります。だから、とも君のことを思い出していたのです。でも、不思議なものです。私がある日、初めて声を掛けた子どもが、とも君の妹だったなんて。

すると、女の子のクラス担任の先生が再び声を掛けてくださいました。

「とも君、元気なようですよ。今は毎日、学校から帰ってきたら近くのグラウンドの外周を走っているんですって。初めの頃は、ジョ

ギングに行つたまま帰り道がわからなくなつてしまふということもあつたらしく、お母さんも自転車についていたようですが、今は、一人で走つて家に帰つてくるらしいです。近々、子ども向けのマラソン大会に出場することになっているのだそうです。それに向けての練習の日々だそうですよ」

「とも君は、今も走っているんだ」

三年分成長したとも君の姿を想像しながら、森山先生の保育はここに生きていると感じた瞬間でした。子どもを信じ、子どものありのままの素晴らしさを認める保育は、時を経て、子どもの良さをさらに伸ばし続けているのです。